

# 五島の自然並びに人文地理環境の 社会集団成員に及ぼす影響

—— 社会的緊張の実態研究 ——（第一報告）

長崎大学 学芸学部 心理学教室

沢		英	久
緒	方		劔
松	岡	重	博
武	藤	雪	下
川	崎		宏
水	田	善	次郎

## 〔I〕序及び研究目的

集団内或は集団の間の不和、対立、斗争等の関係を社会的緊張（Social Tension）という言葉で表示するようになったのはごく最近の事であり、この言葉が意味する所は必ずしも明瞭でなく、問題がすこぶる多面的であり、複雑な内容を持ち、色々な原因から起り、様々な形態をとってあらわれる。勿論我々は物理的、生理的な緊張については比較的明瞭に何を意味するかを理解出来る。また心理的、精神的な緊張についても、日常体験し使用もしている所であって、不安や期待や欲求などの根底にある心理的不均衡として解している。しかし社会的緊張となると何を意味するか必ずしも明瞭でない。

Robert C. Angell は、個人或は集団に存在する張りつめたまさに決裂にいたりそうな関係及びこのような関係にある個人または集団の相手方に対する敵意ある態度という二つの意味を含めている。

しかし社会的緊張の実体は「張りつめた」とか「決裂にいたりそうな」といった関係なのか、「敵意ある態度」といった一定の心理状態なのか疑問が残る。しかし一定の心理状態が発生するためには、何らかの外的条件が存在せねばならぬし、その外的条件の第一には相対峙する個人間及び集団間の一定の関係があげられる。特に両者の間の目的、関心、生活態度、価値観等に著しい相違がある場合、前述の心理状態は発生し易いといえる。更にはこれ等が誘引となって、両者の間に相互的な偏見、敵意、憎悪、排他感情等が現実に発生したとき、はじめて両者の間に緊張が存在するといえる。此の意味において社会的緊張は単なる客観的な関係でもなく、単なる心理状態でもなく、むしろ二つの合一態であり、一つの社会的心理現象であると

いわねばならない。

それでは緊張はいかなる場合に起り、また何故おこるかについて、原理的にいい得ることは社会緊張を引起し易い状況には内的なものと外的なものとの区別されることである。前者についてはある性格傾向（我儘で自己中心的な人、神経質な人、偏見の強い人、劣等感をもつ人、失意の状態にある野心家、自負心の強い人等）をもつ人が、しばしば紛争やあつれきを生じ易いことは日常よく経験する。同様のことが集団乃至社会がもつ性格（派閥といわれる割拠的自己中心性、附和雷同の権力に対する盲従性、部落的郷土的自負心等）も集団間緊張の内在的原因となりうる。

しかしかかる内在的原因のみから社会緊張は生ずるものでなく、むしろ個人や集団がおかれている外部状況が同様に発生にあづかって力がある。むしろ外部状況が性格形成に力をいたしたと考えられる。かかる外部状況はその中におかれている個人なり集団なりの地位、待遇、権利、利害、近接関係、資力、外部からの評価、慣習、価値体系、集団目的、所属等と無関係ではなく、これ等が当事者間でどのような客観的關係にあるかということである。かく社会緊張を引起す要素をその当事者の内部と外部に求める必要がある。

更にかかる条件が揃ってもそれだけでは緊張は必ずしも発生しない。そこには客観的条件が兩者或は一方によって「望ましからぬもの」「理想に反するもの」「不当なもの」として考えられ、またそれを変化することが可能であると考えられた場合にのみ、緊張は不可避のものとなるといわねばならない。

以上の如き理論に従って五島における社会緊張の実態を探究するにあたり、第一に明らかにせねばならぬことは内在的 Tension 傾向だと考えられる。従って本報告では内在的 Tension 傾向を性格と家庭及び社会の場における欲求傾向とから追求することにしたのである。

## 〔Ⅱ〕 調 査 方 法

① 調査対象地域：長崎市を中心として文化的、生活的交流の系に従って一次的直接的交流圏（A地区）として福江市地区、二次的間接的交流圏（B地区）として奈留、久賀地区、及びその中間的交流圏（C地区）として三井楽地区を選定。更に比較地区として（D地区）長崎市をえらんだ。

② 調査人員：各地区とも性格の発達過程を明らかにする意味で、小学5年生（男、女）中学2年生（男、女）青年（男、女）成人（男、女）の年齢区分に従い、各地区、各年齢段階、男、女別50名を調査対象とした。総計約 1,500名

③ 使用テスト： { 矢田部一 Guilford 性格検査  
                  { 基本的欲求検査（三好稔編）

④ 調査期間：9月初旬より10月下旬まで

## 〔Ⅲ〕 結果の整理並びに考察

〔Ⅰ〕 矢田部一 Guilford 性格検査から見た内在的 Tension 傾向：

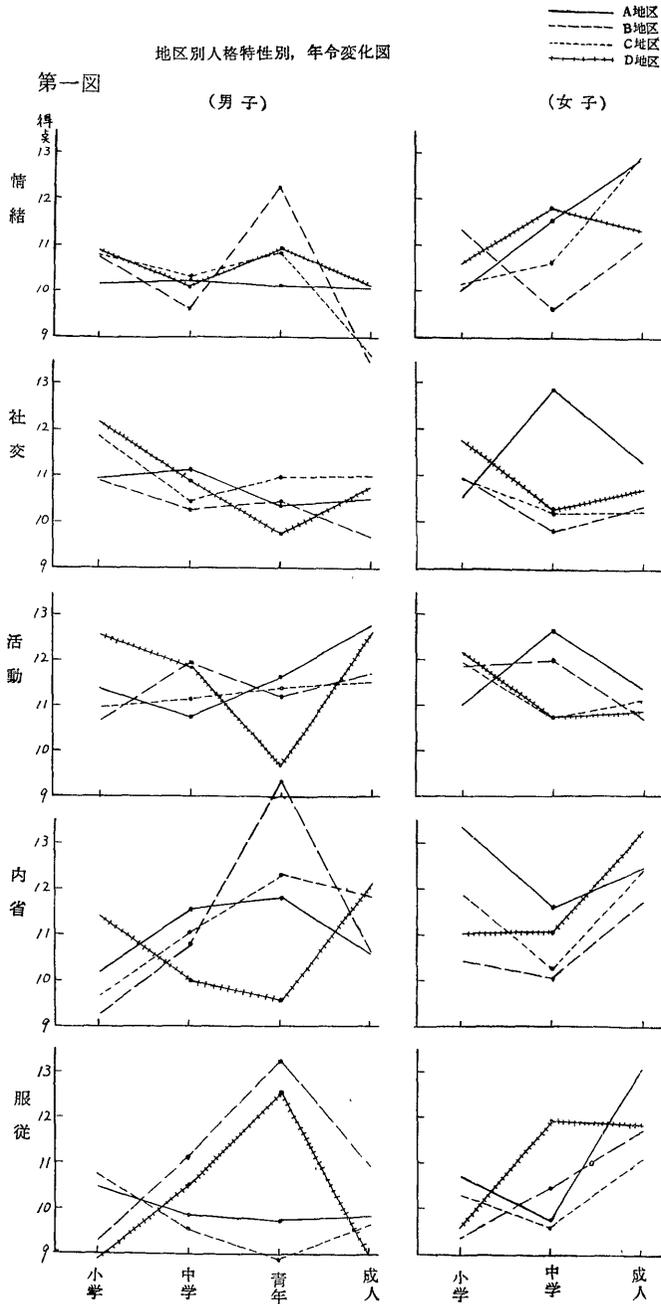
検査結果を①情緒不安定性（度々ゆううつになる等の陰気な悲観的な性質、劣等感、自信が

ない性質、神経質、心配性、いらいらする性質等) ②非社会的(不満が多い性質、不信性、短気、自己中心、攻撃的な性質、社会的活動性、空想する性質、過敏性) ③活動性(仕事が速い、きびきびした動作、人と一緒にはしゃぐ、気がるさ、衝動的性質) ④内省的(思索的傾向、瞑想的反省的傾向、悲観的性質) ⑤服従的引込思案、(リーダーシップがない、組合やグループのためには働かない) 以上5つの特性に従って整理したのが第一表であり、各調査地区別に発達的な観点から図示したのが第一図である。

第一表 人格特性別、地区別得点表

地区	情緒安定性				社交性				活動性				内省的				服従性			
	小学	中学	青年	成人	小学	中学	青年	成人	小学	中学	青年	成人	小学	中学	青年	成人	小学	中学	青年	成人
(男子) A	10.15	10.29	10.14	10.06	10.96	11.17	10.37	10.5	11.34	10.76	11.62	12.73	10.20	11.52	11.8	10.66	10.48	9.86	9.78	9.85
S.D. <sup>2</sup>	(11.49)	(15.47)	(18.06)	(20.34)	(15.58)	(10.10)	(61.07)	(13.31)	(15.58)	(14.58)	(13.44)	(15.05)	(15.68)	(13.81)	(19.28)	(12.11)	(20.41)	(10.04)	(18.83)	(24.04)
B	10.77	9.6	12.25	8.47	10.92	10.23	10.44	9.69	10.64	11.96	11.17	11.69	9.28	10.74	14.33	10.69	9.26	11.17	13.29	10.91
S.D. <sup>2</sup>	(12.28)	(18.72)	(20.10)	(28.75)	(14.42)	(20.12)	(16.62)	(27.67)	(12.07)	(21.31)	(10.31)	(25.21)	(8.92)	(5.13)	(7.15)	(9.79)	(16.43)	(11.27)	(9.33)	(24.94)
C	10.75	10.33	10.89	8.61	11.85	10.43	10.98	10.99	10.98	11.2	11.36	11.5	9.68	11.04	12.31	11.83	10.74	9.52	8.88	9.64
S.D. <sup>2</sup>	(21.13)	(14.00)	(18.31)	(18.93)	(11.11)	(3.37)	(16.69)	(17.71)	(16.58)	(12.72)	(16.80)	(24.42)	(10.62)	(9.87)	(14.29)	(12.94)	(19.81)	(12.28)	(15.85)	(16.80)
D	10.87	10.28	高 校 10.92	10.13	12.16	10.90	9.72	10.77	12.54	11.80	9.62	12.64	11.37	9.98	9.58	12.13	8.91	10.54	12.51	8.91
S.D. <sup>2</sup>	(15.49)	(13.27)	(19.26)	(28.52)	(14.82)	(13.93)	(15.72)	(26.66)	(14.62)	(12.11)	(12.92)	(21.55)	(14.58)	(16.38)	(11.09)	(16.37)	(12.99)	(15.55)	(22.90)	(22.34)
(女子) A	10.03	11.54		12.93	10.57	12.87		11.29	11.06	12.64		11.37	13.32	11.6		12.54	10.72	9.78		13.15
S.D. <sup>2</sup>	(16.72)	(14.15)		(25.82)	(17.14)	(11.12)		(24.95)	(13.78)	(15.11)		(20.66)	(11.02)	(11.68)		(12.29)	(15.82)	(9.77)		(18.56)
B	11.39	9.63		11.62	10.97	9.80		10.33	11.82	12.0		10.7	10.48	10.09		11.73	9.36	10.48		11.74
S.D. <sup>2</sup>	(17.30)	(19.71)		(20.83)	(13.33)	(22.26)		(15.85)	(17.51)	(13.39)		(24.03)	(13.05)	(16.02)		(15.21)	(12.60)	(18.04)		(19.18)
C	10.18	10.61		12.99	10.93	10.20		12.27	11.96	10.72		11.11	11.92	10.28		12.44	10.34	9.64		11.12
S.D. <sup>2</sup>	(22.13)	(22.80)		(17.43)	(19.52)	(13.73)		(16.88)	(13.72)	(14.52)		(23.33)	(10.63)	(17.08)		(12.84)	(17.34)	(10.65)		(13.96)
D	10.64	11.83	高 校 12.5	11.33	11.75	10.24	9.69	10.70	12.15	10.73	9.89	10.88	11.06	11.08	12.54	13.32	9.58	11.92	12.1	11.85
S.D. <sup>2</sup>	(13.45)	(12.53)	(17.96)	(23.34)	(12.32)	(12.65)	(12.58)	(15.83)	(15.06)	(13.69)	(11.99)	(24.65)	(10.70)	(8.08)	(16.45)	(12.62)	(11.50)	(11.77)	(20.07)	(20.22)

・印地区差の有意を示す。(1%)



第一表及び第一図から内在的 Tension 傾向を発達の観点から検討考察すると、

① 情緒性

情緒の安定度は Tension の内的条件として第一にあげられる。不安定の根本には、抑うつ傾向、劣等感、神経質、主観性等が考えられる。かかる不安定性の外的原因については、生活条件、家庭状況、諸制度、慣習、物的条件等色々追求されるであろう。本調査の結果において

も、明らかに生活的文化的交流圏の差異により男女共に大きな差異を示している。即ち小学の段階では地区差が殆んど見られないが、青年期に入るに従って差異がはげしくなっている。

男子にあってはA地区はD地区と同じ発達傾向を示しているがB地区は青年において特に著しい不安定傾向を示している。逆に成人にあってはB、C地区は著しい安定傾向を示している。此の事は両地区における成人男子の専制的な君臨ぶりを物語っていると思われる。これに反し女子にあっては年齢発達と共に不安定傾向が増大し成人婦人において著しい。此の事は五島地区における婦人の社会的地位の低さ、及び家庭における婦人と主人との関係の不安定さを物語っていると思われる。生活的文化的中心圏との交流関係が間接的であればあるだけ、制度、慣習等の文化的発達のおくれから来る情緒的不安定性傾向の強さが見られる。特に成人において著しい。

## ② 社会的内外向性

これは社会的接触をさける傾向があるかどうかで、協調性、客観性に富む者は神経質でなく、愛想もよく、劣等感も少いといえよう。それだけにTensionの内的傾向が著しくないとと思われる。この社会的内外向性について、男子にあっては各地区大差はないと思われるが、女子にあってはA、C地区が著しい社会的内向性を示している。特にA地区中学女子において著しい。これは文化的中心地区との心的接触が拡大されるに従い、女子特有の虚栄的傾向も手伝って、劣等意識からくる引込思案的傾向の結果と思われる。

## ③ 活動性：

これは動作がきびきびし、仕事が速く、困ることにぶつかってもほがらかであり、協調性もあり、いきいきしているかどうかである。この活動性について、男子は小学では長崎(D)地区が著しく活動傾向が強く五島地区は非活動的であるが、年齢発達と共にその差はなくなっている。女子にあっては、A、B地区が中学でD地区より著しい活動性を示し、成人においては男子同様地区差がなくなっている。これ等のことから男子の子供における文化的遊技的刺戟の弱さが五島地区において特に感じられ、また五島地区の女子においては家庭の主婦としての仕事がすでに中学の時期において大なるものがある事及び成人の場合は仕事が全地区とも全生活の中心になっていることがうかがわれる。

## ④ 思考的内外向性

思考的内向性は、用心深さ、人の裏を考える、深く考えこむ、実行性の乏しさ、こせこせしている等の傾向をいうのである。従って内向性の人にあっては抑うつ性が強く潜在的Tension傾向が大であるといえる。

この事について男子にあっては小学で五島地区は長崎地区より思考的外向の傾向が強く、青年にあっては著しく逆の関係になっている。青年の此のような実行性の消失は、教育上一考を要する問題だと考えられる。特にB地区において甚だしい。成人においては逆に思考性が弱まる傾向がある。むしろ児童期から青年期にかけては思考的外向の傾向即ち積極的実行性が強く、成人において反省性が強くなっていくのが普通であろう。自然並びに生活条件の著しい影

響が見られる。これに対し女子にあっては、A、B地区の傾向が全くことなり、子供の時からすでに著しい差を示している。女子の家事及び仕事の負担の過重さがB地区において特に強く感じられる。A地区は部落づくりの強い運動をおこなっている所で、生活全般についての強い反省がなされているだけに、男女共に強い思考的反省傾向を示しその効果が子供に強くあらわれていると思われる。

## ⑤ 服 従 性

これは、はにかみ、引込思案、依頼心等の傾向で、人の先に立って働くことはなく、人あつかいが下手で、集団の世話役が出来ず、目上の人の前ではかたくなるような特性である。これについて男女共に、A、C地区とB、D地区とが青年期において著しい逆傾向を示している。即ち前者が後者に比し著しく支配的、主導的傾向を示している。子供では各地区大きい差異は示していない。B、D地区は同じ傾向を示しているが、その内容的な差が考えられる。即ちB地区における青年の服従性は、その社会並びに家族の制度、慣習の中で古い権威（しきたりや形式）の下に圧迫されており、それに対する消極的な服従が強いられて一つの人格を構成していると考えられる。D地区での青年の服従性は大人の文化の世界、実証された世界が、自己の生活視野が拡大されていくに従い、自己の上に権威をもってのしかかって来、かかる文化的な威圧の下における服従性と考えられる。従ってそれはより大きい支配性獲得のための屈身と思われる。その事はD地区の成人が最も大きい支配性を示していることで伺える。而し女子の場合は成人すると共に主婦として家庭に入るのでその間の事情がことなり、各地区とも日本的夫唱婦隨の姿が根強いといえる。

## 2) 欲求傾向から見た内在的 Tension 傾向

人間の欲求の傾向を追求することは、また内在的 Tension 傾向を診断する上から大切なことと思われる。潜在的な Tension 傾向も欲求が一つの動因となってその対象に向って行動が顕現しましょうから。そこで家庭場面、社会場面と各生活領域ごとにそれぞれ愛情(L)成就(A)所属と参加(B)独立(I)経済的安定(E)社会的承認(S)恐怖及び侵害をさける(F)罪をさける(G)社会的見解(W)の各基本的欲求項目について各項目12計108の具体的な欲求例を家庭場面、学校場面、社会場面より均分にとり、(各場面36)無作為に配列し、9個ずつの12群に分け、各群中から自己の現在強く欲求しているものを各群3個づつえらばせ項目に従って整理し、第二表以下の結果を得た。(但し本調査では学校場面での欲求は除外した<sup>o</sup>)

### ① 家庭場面と社会場面とでの欲求傾向の差(第二表)

個体は家庭や社会生活の場で何等かの障碍なり阻止なりにより充足されない対象に向って強い欲求傾向を形成するものであろう。それ故えらばれた欲求を家庭及び社会での場面別に整理し、その頻度を百分率で示したのが第二表である。

此の表より、男子は五島、長崎(D)地区で有意な差はないが、成人において、長崎地区より五島地区が家庭場面での欲求が強い傾向が見られる。女子においては、明らかに五島地区では家庭場面での欲求が強く、長崎(D)地区婦人の欲求は著しく社会場面に移行し、男子と殆ん

第二表  
(男子) 家庭場面と社会場面とでの欲求傾向差

年段 令階	地区 場面	A	B	C	五 島 総 計	D
		小 学	家 庭	47.6%	35.3	X 48.5
	社 会	52.4	64.7	51.5	54.9	54.6
中 学	家 庭	43.9	38.8	41.	43.1	42.9
	社 会	56.1	61.2	59.	56.9	57.1
青 年	家 庭	40.4	41.	42.1	41.3	40.2
	社 会	59.6	59.	57.9	58.7	59.8
成 人	家 庭	38.8	31.7	34.1	35	30
	社 会	61.2	68.3	65.9	65	70

(女子)

小 学	家 庭	X 46	42.7	X 49	X 47.4	44.6
	社 会	54	57.3	51	52.6	55.4
中 学	家 庭	X 47.8	38.7	43.7	43.9	36.3
	社 会	52.2	61.3	56.3	56.1	63.7
成 人	家 庭	37.1	44.2	39.1	39.1	31.7
	社 会	62.9	55.8	60.9	60.9	68.3

・ 場面による比の差の有意を示す。(1%)  
× 有意差のないことを示す。

ち主人が社会場面での欲求が大きい程同地区の婦人の家庭場面での欲求が大きく、社会場面での欲求が小さくなっている。これは主人が社会的に活動すればする程婦人が家庭にしばられている事を意味していよう。そして此の傾向はB地区が最大で、ついでC地区、A地区となっている。

② 次に各欲求項目別に各地区を比較検討すると第三表が得られる。

此の表により、先づ五島地区と長崎(D)地区とを比較すると小学校段階では有意な地区差は各項目とも見られないが、女子にあって、E(経済的安定の欲求)S(社会的承認の欲求)及びW(社会的見解の欲求)の三項目に於て有意差を示している。即ちE、Sは五島地区が低く、Wは五島が高い傾向を示している。中学になりますと小学と同じ傾向を示しながらも、男女共にE項目で五島が高く差が大きくなっている。成人においては、Eは男女共に差を示さなくなり、かわりにI(独立の欲求)B(所属と参加の欲求)及び女子のF(恐怖及び侵害をさける欲求)に於て長崎(D)地区が高くなり、G(罪をさける欲求)において五島地区が著しく高くなっている。ここいらに離島としての五島の性格が伺い知られよう。殊に狭い生活領域がGの欲求を高めていると思われる。

更に地区別に考察すると、小学で地区差がはげしく、成人になるに従い地区差が減じてい

ど差がなくなっている。此の事は性格傾向の項でも見たように、五島地区の婦人が家庭場面で相当に圧迫されていることを裏がきしている。しかも子供の時期には男女及び各地区有意差がないのに年齢と共に有意差を示しているのは、自然並びに人文地理的環境の著しい影響を物語っていると思われる。

之等の傾向を更に地区別に検討すると、男子にあってはA、C、D地区は青年期まで有意な地区差を示さず、B地区は児童期において、家庭場面での欲求が著しく少く、社会場面での欲求が強く出ている。しかし中学から青年へと場面差はちぢまり成人期において再び著しい差を示している。更に特に目立つ傾向は五島で婦人と主人との関係が地区により対照的になっていることである。即

第三表 欲求項目別地区差

(男子)

		L	A	B	I	E	S	F	G	W
小学	A	7.3%	16.4	10.3	11.9	10.2	×11.8	9.8	14.5	7.8
	B	×4.0	×17.9	10.7	12.1	9.8	×7.2	10.7	×19.7	7.9
	C	6.9	×14.9	11.1	12.8	9.8	9.0	11.1	15.5	8.9
	五島計	6.6	16.1	10.3	11.9	10.6	9.4	10.6	16.7	7.8
	D	7.2	18.2	10.6	13.6	9.4	10.6	8.8	15.5	6.1
中学	A	5.8	14.7	10.5	11.9	11.7	10.0	9.2	18.6	7.6
	B	5.3	×16.4	11.7	11.1	12.5	8.1	10.3	×20.8	×3.9
	C	5.8	15.3	11.7	12.8	11.2	×7.6	9.4	19.4	6.8
	五島計	5.8	14.7	10.8	12.3	•11.7	8.8	10.0	19.3	6.6
	D	5.8	15.0	10.8	14.7	8.6	8.2	11.6	18.9	6.4
成人	A	14.6	12.2	8.7	8.7	15.4	9.2	10.4	15.4	5.4
	B	15.4	×14.2	×7.5	8.8	×14.6	9.6	×8.7	16.2	5.0
	C	×11.6	12.1	9.1	7.9	17.9	9.1	9.6	×19.0	×3.7
	五島計	13.2	12.5	•8.7	•8.2	16.6	9.2	9.6	•17.5	4.5
	D	14.2	12.5	10.4	10.4	16.7	9.2	8.3	15.0	3.3
(女子)										
小学	A	6.4	17.2	11.2	13.1	×7.8	11.6	10.6	14.8	7.3
	B	×4.0	×18.3	9.6	13.2	10.4	×6.5	10.6	×20.2	7.2
	C	7.2	14.8	11.5	13.7	×7.4	10.3	10.5	14.3	×10.3
	五島計	6.4	16.7	10.6	12.8	•8.3	×9.3	11.2	16.4	•8.6
	D	7.2	15.6	10.0	12.8	10.8	11.4	10.0	17.2	5.3
中学	A	6.1	15.0	10.0	12.7	11.6	×0	10.5	18.6	7.5
	B	5.5	×16.8	11.7	×10.6	12.8	7.8	9.7	×20.6	5.0
	C	6.1	×17.2	11.4	13.1	11.1	6.7	10.0	20.2	4.2
	五島計	5.8	15.6	10.3	12.5	•12.5	6.9	11.3	19.3	5.8
	D	7.5	16.1	10.3	13.2	8.9	8.3	11.2	20.6	3.9
成人	A	12.5	12.6	8.8	8.8	15.5	6.3	10.4	×20.5	4.6
	B	11.7	12.9	8.3	10.4	×20.1	×5.8	10.1	18.3	×2.6
	C	12.1	12.1	7.9	8.3	16.7	7.9	12.1	18.3	4.6
	五島計	11.3	12.5	8.3	•9.6	17.1	6.7	11.7	•18.8	4.0
	D	10.4	11.7	9.7	12.9	16.7	5.1	15.0	15.0	4.3

×, •地区による有意差を示す。(1%)

る。これは大人になれば文化的交流の機会に恵まれることによると思われる。そして此の事は比較的文化交流にめぐまれないB地区が最も長崎(D)地区と差異を示し、ついでC地区A地区となり、文化的中心圏からの距離に相応している。明らかに人文地理的環境の影響と思われる。

③ 更に各項目ごとに期待頻数の百分率(Z)を基準にして、それからの各項目の百分率(X)のずれの2乗の総和を求め  $\sqrt{\frac{\sum (X-Z)^2}{N}}$  の計算をして基準からの逸脱の度を検討した。第四表がそれである。

第四表 基準からの逸脱度

地区	場面 年齢	家庭場面			社会場面			全体		
		小学	中学	成人	小学	中学	成人	小学	中学	成人
A	男	3.7	4.2	4.7	3.3	4.5	3.6	3.0	3.7	3.4
	女	4.3	3.2	× 6.1	3.6	5.0	4.1	× 3.5	3.8	× 4.7
B	男	× 7.3	3.9	5.0	3.4	5.2	3.5	× 4.8	× 5.1	3.8
	女	× 6.7	× 5.8	× 6.3	× 4.8	4.6	3.3	× 3.9	4.9	× 5.3
C	男	3.5	× 5.4	× 6.8	3.3	4.6	4.0	2.8	× 5.4	4.2
	女	4.0	× 5.6	4.9	2.3	4.6	4.2	2.8	× 5.0	4.2
五島計	男	• 4.1	4.3	• 5.8	3.3	4.2	3.4	3.3	• 4.1	4.1
	女	4.6	• 5.0	5.5	• 2.8	4.4	4.0	3.4	4.4	4.5
D	男	5.6	5.1	7.1	3.7	4.0	3.3	3.8	5.8	3.8
	女	4.7	6.4	5.9	4.5	3.4	4.0	3.7	4.8	4.0

• 五、Dの有意差を示す。 × 地区間の有意差を示す。

此の表から五島地区とD地区を比較検討すると五島地区が各年齢ともわずかに逸脱が少く欲求各項目間の偏向がないといえる。しかし各地区ごとに検討すると、B地区が最も欲求偏向がはげしく、ついでC、Aの順になっている。ことにB地区の女子に欲求偏向がはげしく、また場面別では各地区とも家庭場面で大きい偏向を示している。これ等の結果からも今まで見て来た文化社会的環境の影響が著るしく、特に家庭の在り方について一考を要すると思われる。

### 〔Ⅲ〕 要 約

以上の調査結果から五島地区における内在的 Tesion 傾向について次の事が要約される。

- ① 内在的 Tesion 傾向は生活的文化的中心圏より遠いほど、その情緒的不安定性、思考的内向性、衝動性及び服従性において強い特性を示している。即ち自然的、文化的不満が内向して潜在的緊張度が高くなっている。大なる実行活動による解消が望まれる。その為には各年齢に相応した活動の場の提供が望ましい。
- ② 欲求傾向の調査結果からも①項と全く同じ結果が得られた。特に家庭場面での不満が高い

ことは、家長制度や家庭における婦人の地位、及び主人の家族各員に対する態度、等改められるべき多くのものがあると思われる。

## 文 献

- ① 日本文科学会編 社会的緊張の研究 昭28
- ② Robert C. Angell : Unesco and Social Science Research  
: American Sociological Review Vol15No.21950